SOLVE

Sumire

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＯＬＶＥ

【Ｎコード】
Ｎ３９１２ＢＡ

【作者名】
Ｓｕｍｉｒｅ

【あらすじ】
姉の佳里（かがり）が死に、姪の初奈（ういな）を預かる事になった洋介（ようすけ）は佳里の残した家で初奈とともに暮らすことになる。姉の部屋から洋介に宛てた手紙が見つかったため洋介は佳里の家についてすぐに手紙に書いてある佳里の部屋に向かう。そこには大きなパソコンがあり、その中には佳里が生前に就いていた職業の探偵についてのデータが残されていた……

一話（前書き）

初奈の話し方が読みづらいかもしれません……

一話

「あれだけ泣いたんだ……無理もないよな……」
洋介（ようすけ）の肘のあたりに寄り掛かり、洋介の姪である初奈（ういな）がスースーと静かに呼吸しながら眠っている。
初奈の両親は五日前にこの世を去った。事故死だ。どのような状況だったのか詳しいことは洋介も知らされていない。そして両親が死んだ今、誰が初奈を預かるかという話になり佳里と洋介の父であり初奈の祖父にあたる正勝（まさかつ）は仕事があるため昼間面倒を見ることができない。初奈はまだ六歳だ。そんな子に昼間ずっと留守番をさせるわけにもいかない。保育園などの施設を探すにしても時間がかかる。そうなると昼間ずっと暇で、それなりに面倒を見ることができる者が初奈を預からなくてはいけない。
そこで名前が出たのが洋介だ。中学を卒業して初めての夏だというのに高校にも行かず家にただいるだけという生活を送っていて、さらには年齢も十六歳とそれなりに面倒が見られるというわけで初奈を預かることになったわけだ。
生活する環境が変わってしまっては初奈が戸惑うかもしれないという正勝の案から洋介は佳里の残した家で初奈と暮らすことになった。葬儀を行った実家から佳里の住んでいた家までは結構な距離がある。その間を移動するにはバスに乗るのが一番だ。バスに乗ったのなどいつぶりなのか……
乗り方もほとんどわからない中、洋介はなんとか目的の駅へ向かうバスに乗り今に至るというわけだ。
髪の毛を肩くらいまで伸ばし白に近い黄色の服を着た初奈の寝顔は、とても安心した表情をしているがその奥からはこれからの生活への不安が痛いほどに感じられる。
たとえ一時的なものであったとしても安心して眠ることをして心身共に休めなくては初奈の小さな体にはとても耐えられないのだろう。

洋介は初奈のそんな姿を見て自分がつくづく情けない人間だということを実感していた。
「初奈は本当に強いな……」
洋介の手は無意識の内に初奈の頭を優しく撫でていた。

目的の駅に着くまでの約一時間の間、初奈は一度も目を覚ますことはなかった。
バスから降りる時に起こそうと思ったが、少し気がひけたので抱きかかえてバスを降りることにした。初奈の体はとても小さく、軽かったがとても温かい。
駅から佳里の住んでいた家までは歩いて五分ほどの場所にある。
近くには大型のスーパーマーケットもあり生活するには十分楽な場所だ。
家は４ＬＤＫの一軒家だ。結婚してすぐにこれだけ立派な家を建てたということは相当な量の貯金があったのだろう。
正勝から預かった合鍵を使い家の中に入る。とても綺麗に掃除されていて住み心地もよさそうだ。
ちょうどそのときに初奈が目を覚ます。
「もうおうちについたの？」
「起こしちゃったか？ごめんな」
「ううん。だいじょうぶ」
「佳里姉さんの部屋、どこにあるかわかるか？」
洋介が急にこんなことを訊いたのには理由があった。
実家の佳里の部屋から洋介に宛てた手紙が見つかり、その内容は「自分の部屋に来るように」というようなものだった。
日付も書いてあった。それは今からちょうど一週間前で佳里がこの世を去った二日前のものだった。もしかすると自分が死ぬことを悟り、この手紙を書いたのかもしれないと思いまず最初に佳里の部屋に行ってみることにした。

「おかーさんのへやは、にかいにあるよ」
初奈はとてもゆっくりと喋る。しかしとても聞き取りやすいので会話をする分にはなんの問題もない。
初奈を降ろし洋介は一人で二階にある佳里の部屋へと向かう。
階段のすぐ横の部屋を覗くとリビングがあり、いくつかのダンボールが置いてあった。
多分洋介の着替えなどが入っているダンボールだろう。
階段を上るとすぐ左にある部屋のドアが半分程開いていた。
佳里の部屋がどれなのかはわからなかったため、まずその部屋の中を覗いてみる。
部屋の中は一筋の光すら差し込んでいない。窓がない部屋だとしても暗すぎる。廊下も薄暗いがドアをさらに開きその隙間から差し込んだ光を頼りに部屋の中の様子を窺う。
それでも部屋の中の様子はわからない。普通の部屋ならばドアの横に電気のスイッチがあるはずだ。洋介は手探りでそれを探し、部屋の電気をつける。
「なんだよ……この部屋……」
電気がつくと同時に洋介の目に飛び込んできたものは四畳程度の広さの中に一台の普通のものより大きめのパソコンが一台あるだけの殺風景な部屋だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3912ba/

SOLVE

2012年1月10日03時51分発行